

北海道各地から産出する黒曜石
その16

なかがわちいき

中川地域

(Nakagawa Area)

中川町では、丸山と呼ばれる天塩川の浸食を逃れた標高62.1mの小高い丘から黒曜石が転石として見つかります。その露頭では地層の傾斜からはっきりと2つの地層を識別できます。双方とも砂礫を主体とし、下部は更別層、上部は中位段丘堆積物に分類されています。更別層は第四紀中期更新世の堆積岩(砂礫岩)であり、天塩平野周辺の丘陵を構成する地層で、今回の調査地にはその南端部がわずかに露出しています。露頭では更別層が平行層理～低角の斜交層理となって約20度、北へ傾斜し、その上部は天塩川によって形成された中位河成段丘堆積物(海成段丘堆積物の可能性もある)に覆われます。

ここで採取される黒曜石ガラスの化学組成は、分析結果から、白滝Ⅰ組成グループ(十勝石沢川産)に比較的良く合致しそうなことが分かりました。ところが、仮に十勝石沢川から転石として流されて来た事を仮定した場合、オホーツク海へ注ぐ湧別川流域を流れるため、日本海へ注ぐ天塩川流域にある礫層に含有される可能性はないと思われます。そのことは、白滝Ⅰ組成グループの噴出年代がおよそ220万年前のものと推定され(和田ほか、2014)、その時代の地形を考慮しても無理があります。また白滝産の黒曜石は湧別川によって運搬され、その流域に河川礫として分布する他、湧別沖のオホーツク海まで達します(赤松ほか、1996)。海流に乗って辿り着いた可能性もあるかもしれませんが、通常、黒曜石礫は沖合の海底に堆積しているものばかりであり、浮遊して海流によって運ばれたということは全く期待できません。

以上のことから考えますと、中川町字国府(丸山)から採取された黒曜石は、近辺にあるような雄武産や名寄・下川産などのような原産地ではなく、これまで北海道内では知られていない未知の噴出源を意味しております。また同時に新原産地です。(学芸員 向井 正幸)



丸山(標高62.1m)の下部は第四紀中期更新世の堆積岩(砂礫岩)である更別層、上部は中位段丘堆積物。



砂礫岩である更別層の中に黒曜石の礫(中央)が含まれる。これも向井が発見した新原産地である。

地学シートHP



地学Sheets

Asahikawa City Museum

旭川市博物館HP

